

---

# 日本台湾学会 ニュースレター

*The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies*

---

第 42 号

---

< 目次 >

|                   |      |
|-------------------|------|
| 巻頭言               | … 1  |
| 特集 台湾／日本に行けない台湾研究 | … 3  |
| 学会活動報告            | … 16 |

## 巻 頭 言

### 「台湾に行けない台湾研究者」の選択肢を考える

日本台湾学会理事長 松田康博

欧米に行きましょう！

提言というよりもこれは「暴言」かもしれない。万人には通用しないことは百も承知なので、頭の体操だと思って読んでいただきたい。言うまでもなく、台湾は徹底したコロナ水際対策をとり、ビザ無し渡航を2年以上停止し、一度は再開した居留ビザ（訪問学者）の発給を停止して10カ月以上経つ（2022年3月現在）。つまり、例外的に長期滞在ビザを得た人と台湾籍の方を除き、我々は台湾に渡航することができない。運良く渡航できたとしても厳格な隔離政策が待っている。

実は私は、昨年末に、所属大学の学術交流でフランスに行くことができた。この原稿も米国で書いている。これは台湾の大学での客員研究をねらって2020年から3回空振りしたりベンジの結果である。昨年は、台湾からの招聘状を入手し、翌週にビザ申請をしようとしていた矢先にデルタ株の感染爆発があり、またも「鉄のカーテン」が目の前でぴたりと閉じたのだ。

そして、「来週には再開しないかな」と陳時中氏が何を言うかを毎日のようにチェックしているうちに夏休みが終わってしまった。恨めしい。ところがその時、たまたま前年から順延していたフランスの研究機関との交流を再開するかどうかの決断に迫られたのである。

日仏両国の出入国規制、両機関の出張・受け入れ規制、フランス国内での行動規制などをつぶさに調べたところ、指定ワクチンの接種完了証明があれば、フランス渡航にはビザも隔離もいらぬことが判明した。思い切って賭に出た結果、1カ月間パリに行くことができたのである。「それなら米国出張ができないか」と年末に思い立ち、計画した結果、オミクロン騒動をすり抜けて3月の米国出張を実現できた。

欧米の各都市で、台湾人を含めた新老朋友と（会食を含めて）対面で意見交換をしていると、あたかも台湾にいるかのような錯覚に陥る。対面のレクチャーや座談会では、参加者を見回して反応を確認しながら熱弁を振るった。ここスタンフォード大学フーバー研究所では「蔣経国日記」などを閲覧している。オンラインとは違う、格別の充実感がある。

指定ワクチンが接種完了していれば、いまや欧米（以外でも増加中）ではほぼ隔離なしで入国が可能である。日本の入国規制も今年3月から大幅緩和され、指定ワクチンの接種が完了し、帰国前後のPCR検査で陰性ならば、米国等からの入国の際、隔離・自宅待機なしで、しかも公共交通機関で帰宅できるようになった。

日本の場合、おそらく最大の障碍は所属機関の規制だろう。大学や研究機関には、いまだ海外出張が原則禁止のところがあるはずだ。まず、個別審査による「例外的渡航」の窓をこじあける必要がある（私の所属する大学がどのような制度をとっているか参考にした方は個別にご相談ください）。次に、対面方式が回復しつつある授業、会議、面接などを「海外出張者のためハイブリッド方式を可能にすること」を組織内でコンセンサスにする必要がある。

「いや、たぶん今年は台湾に行けるはずだ」という声も聞こえる。私もそう思うし、思いたい。しかし、私が主張するのはヘッジの発想である。突然台湾に行けなくなるリスクは今後も続く。新たな変異株の出現や次のパンデミック（例えば「COVID-22」とか）の際、どの国・地域がどのような反応や対策をとるか、我々には容易に想像がつく。台湾は次のパンデミックでも恐らく即座に最強の水際対策を取るはずである。したがって今年の夏休みに台湾に行けたとしても、それがいつまで続くかわからない。

他方ウィズコロナを選択した欧米（およびその他）は、かなりの確率で渡航可能であり続けるはずだ。台湾が国境を閉じてても欧米はすぐには閉じない。私は今年の夏に台湾に行けない場合、ビザのいらない米国と豪州で台湾や中国に関する資料を閲覧しに行くヘッジ戦略を描いている。

ただし、冒頭に書いたように、これは万人に通用する話ではない。家族の状況、本人の健康状態、所属機関の制約、専門の違い（フィールドワークが必須、等）などがあり、一概に言えない。私自身、呼吸器系の基礎疾患があるため、コロナに怯えて2年間過ごしてきた。出張先で感染するリスクはまだ無視できない。

ただ、たとえそうであっても、上記の発想に基づいて所属機関のルール変更を進めれば、本人でなくても周囲の誰か——たとえば同僚や指導学生——が少し早めに海外渡航を再開し、研究を半歩でも前に進めることができるようになる。声を上げる価値はある。

私が台湾で学んだ最大の人生訓は「窮則変、変則通」であった。初めて台湾を訪れてから36年間、水のように融通無碍かつ無時無刻に行動を変える台湾の方々に、時には感嘆し、時には振り回されてきた。今こそ台湾の「変通哲学」に学ぶ時なのではないだろうか。

台湾に行けなくても、台湾から学ぶことはできる。それが台湾に関わり続ける者の幸運なのだと思う。